山と博物館

第37巻 第12号 1992年12月25日　大町山岳博物館

種池稜線より蓮華・針ノ木を望む

山とカメラに憑かれて　写真と文　木村守文

山とカメラに憑かれて以来、四十数年。十年間は中央アルプスの四季と春・秋の槍穂高を好んで登った。中ア宝剣での岩登りに夢中になったり正月は六年、間ノ岳でやった。また六月の穂高奥又白の静寂にひかれたりしたが、以後三十数年間は北ア北部方面しかも何故か雪の写真が多い。初山行が三月（S24年）の雪と蒼氷を登らされたせいか、新雪と残雪が好きでありピッケルが好きである。

この写真は本年十月末、新雪の鉢ケ岳行のものである。久しぶりに新雪の尾根を味わってきた。雪中技術にはまだ自信があっても十数キロの荷は老骨に応えた。だが山上の気分はやはり最高であり、三百六十度ファインダーの中の景はまた格別であり夢中にさせた。

しかし春から初夏の山麓は花と緑が残雪の嶺に映えて一段と素晴らしい光景を演出してくれる。特に池田～大町周辺は安曇野の景そのままであり花と残雪の連嶺に感歎しないものはいないだろうし、もう安曇野の景観はこの地区のみといっても過言ではないようだ。

数年前ドイツ大使館一行と大町の観光道路で一諸になったことがある。大町の景観の素晴らしさに魅かれて毎年訪れるとのこと。「この素晴らしい景観をいつまでも残して守ってもらいたい」と言われたが、本当にこんな贅沢な景観は他にはないだろうし、いつでも味わえることを幸せに思いつつ、どうかいつまでもこのままでと願うや切である。

これからも稜線と岳麓安曇野を、歩ける限りカメラに止めておきたいと思う。

（大町市在住・日本山岳写真協会々員）

座談会

山岳博物館の現状と将来

山岳博物館は昨年11月に開館40周年をむかえた。この節目にあたり「山博の現状と将来を話し合う機会を」との声が聞かれた。

これは館長の諮問機関である山岳博物館協議会の委員の皆さんによって去る5月28日に実現した座談会の模様の一部である。

出席者（発言順・敬称略）

山本携挙　委員長・元山博友の会会長
松原　繁　大町山の会
北原和好　大町市議会議員
平林照雄　長野県教育委員
倉科和夫　大町東小学校校長
太田　勇　大町の文化を育てる会
寺井篤樹　大町市議会議員
宮島　久　大町市観光協会
飯島喜久代　主婦
横川　仁　大町山岳会
工藤雅男　大町市議会議員
内川敬策　元大町市議会議員
合津今朝吉　大町市議会議員
北沢善一　大町市議会議員
武田　武　山博友の会副会長
・教育委員会社会教育課長　西沢義男
・山岳博物館館長　千葉彬司
同　学芸員　宮野　峯村　清水
（筆写・編集　峯村）

山本　山岳博物館（山博）が創設された昭和26年の当初、そのユニークさと創設の過程での大町の若者の情熱にはすばらしいものがあった。周囲からも非常に期待され、外に向かっては〝大町の顔〟という表現で前面に押し出されてきたが、こうした表現にいつしか耳慣れ、活字の上でも見うけられなくなってくると同時に、大町のコンセプトが薄らいできてしまったような気がする。

皆さんはどうお感じでしょう。

松原　今の山博は研究部門が主なのか、入館者を多くすることが主なのか主目的がボケているように思う。私が山博の活動に携わった30年ほど前には、山での動植物の調査研究事業がたくさんあった。今のスタッフあるいは予算ではそれができないのか、今の状態でよいのか、その辺がボケていると思う。

北原　私も同感だ。一般市民から見ると、観光面で山博を位置づけている部分がある。ところが植物とか昆虫とかに関わってきた人にとっては研究面を重視する。

自然科学から今は子供たちが少し離れているようだが、生涯教育も含めて今後はもう少し大切になってくると思う。創設期の原点を大事にして、研究活動の場としての特色を出してよいと思う。それでも客は来ると思う。

山本　観光と学術研究に関してはたびたび論じられてきたが、片方を落とすわけにはいかない。山博が改築された昭和57年ころから、充実度のパロメーターとして入館者数が評価されはじめたし、建物など一般的に見栄えのするハード面にウェイトが寄ったと思う。蓄積された学問的なものは目に見えないだけに、あおりを受けて多少停滞したのではないか。その裏でネックになっているのは職員数であり、いつも議論の最後は人が足りないという話に落ちついてしまう。

北原　学術面を充実していけば、あとはその成果をどう市民や一般の皆さんに親しみやすくディスプレーするかだから、やはり学術面をしっかりすべきだ。私も高校時代（昭和30年ころ）やっていたので、最近停滞しているのは残念だ。あのころは皆燃えていた。自然科学の研究は今は学校でも停滞していると思う。博物館が育てていかなければいけない。

平林　今はほんとうに薄っぺらな知識を誰もが豊富に持っている。それくらいでないと間に合わないらしい。社会の動き、スピードが変わってきた。ところが一方で、学術という言葉で表わされる分野は個々に狭く深くなってきている。それを総合して地域の文化教育の中核にする。また関心のある人は一応鷹狩山へ登らせる。登らせてこの大パノラマを見せて、まず大町の大自然を総合的に大きく見せてから山博へ下ろす。その逆でもいいが、大切なことだと思う。

山本　今の子供達はどうなんでしょう、倉科先生。かつて友の会のメンバーが山博へ集まって一生懸命に標本を作ったりしているうちに研究を掘り下げていったというようなことが、今の子供にもあるのでしょうか。

倉科　一人一研究といえば自然科学分野だったし、専門ではない担任も非常に熱心だった。最近は子供たちも非常に忙しい。先生方も夏休みの研究を理科一本に絞るのはどうかということでまとまらない。しかも子供にも、一つのことを調べてみてわかった、発見したという喜びが薄れかかっている。教師が教えなくてはならない大切なことではあるが…。

山本　ゆとりですかね。春がきたら小鳥を観察したり、花が咲けば手間をかけて押し花を作るといったゆとりが今の子供にはないような気がする。子供だけではない。町で行事を

やっても人が集まらない。やろうじゃないかという人が少なくなった。そんな中でユニークなのが太田さんたち大黒町の有志が中核となって開くイベント『祭in大町』です。ああいう形で始まって、燃えているものもある。何か秘伝のようなものがあるのですか。

太田　お祭りのお囃子や神楽を自分も昔やったという経験のある人が集まって、形になってきたと思う。伝統芸能が後継者不足でなくなっていくのは何ともさびしい。若い世代につなげていくには檜舞台に立ってもらって大勢の人たちに見てもらうことだ。そんな構想で始めた。

山本　檜舞台へ立てる人はわずか。感心するのは裏方として舞台を支える人が大勢おられることだ。しかも誰もが燃えていることに驚きを感じた。今の世の中では考えられないことだ。ところで寺井さんは大町に移り住まれたので私たちとは違って山博を客観的に見ることができると思います。いかがですか。

寺井　平成3年度には8万人が山博を訪れている。この現実を無視するわけにはいかない。私たちはこの8万人の人たちの満足度をもう少し注意深く見る必要がある。

商売の立場から言うと、訪れたお客さんの欲求はまずトイレ、次に何か食べたり一服したい、落ちついたらちょっと見て回ろうか、帰りがけに何か買って帰りたい、ということになる。こういう人たちを〝サイフを開けて来る人〟というが、8万人の中にはかなりいるはずだ。山博だけでは多分対応できないの

で、この一帯をゾーンとしてとらえ、色々な施設で機能を分担して様々な欲求に応える必要がある。登山という面からは、隣接する長野県山岳総合センターとの連携・機能分担が考えられる。

私も学術研究と観光は二者択一ではなく両立させるべきものだと思うが、現在のように学芸員系統の職員が施設運営にあたることに無理があると思う。2つのセクションに分けるべきだ。

もう一つは付属園の問題。これは山博独特の施設なのだから、動物の飼い方、見せ方において観光と学術研究をベストミックスした先端を行くものにしてほしい。

山本　体験コーナーはどうですか。今でも利用度は高いですか。

宮野　かなりの人が使っています。登高器のザイルやザックの消耗もはげしく、取り替えたりしています。

山本　塩の道博物館でも蓑（みの）を着て背負子（しょいこ）で昔かついだ荷を背負ってみるというコーナーがあるが、お客さんが順番を待つほど人気がある。遊びながら体験するコーナーはよい。

宮野　来年2月末完成予定の展示改修でも、新設する山小屋のジオラマの内部では、できるだけ資料を見て触って使ってもらえる展示を考えています。

平林　北アルプスがあって山博がある。山博があって北アルプスがある。

大糸線の車中で、山好きの旅行者が地元の高校生に山の名前を尋ねても答えられない。宝の山にいながら全然関心がない。結局、自然が身近かにありすぎるせいだろうか。

そこで、人手があれば3階の展望室で簡単でよいから山の説明をすればよいと思う。そして「今日もし時間があったら30分で結構です。こんなところがあるから行ってご覧になれば」とサゼッションを与えられればさらによい。

自分自身で生の体験をすること、人の口から直接情報を伝えることが大切だ。

山本　オーディオ・ビジュアル（AV）の進歩も大変なもので、AVによる情報の提供も今や博物館では必要不可欠だと思う。マルチスクリーンの映像には確かに感動する。ただ、何千万もの大金をかけたわりに、見学者は意外にもサッと見て行ってしまうこともある。観光客は時間のかかるものを敬遠するのだろうか。

宮島　団体客の場合は見学時間が決められている。特徴のあるものをガイドさんが何を見なさい、行ってきなさいと説明するので、お客さんはサッとそれだけ見て帰ってくること

になる。

平林　一つでも見て、印象に残していただければよい。晴れた日に「これが北アルプスですよ」と吹き込まなくてはいけない。

倉科　教員の初任者研修を大町で行った際に、教育会館の屋上へ連れていって山を見せながら説明したことがある。改めて「すごいなー」と声が返ってきた。博物館でも学芸員が直接説明すれば、興味を覚えて「あ、そうか」ということになるが、文字だけを追ってもそこまでは無理な気がする。

北原　興味も関心もまちまちな団体客の誰にも好かれることは難しい。興味ある人たちが来た時に満足させるにはどうしたらよいかと考えるべきだ。この点でも学術研究面の充実が大切になってくると思う。

山本　大きな目で見て、これからの大町と山岳博物館はどうあってほしいかお聞かせください。

飯島　やはり大町の山岳博物館。大町の市民が支えている博物館。それが一番の理想。市民の熱意で山博は生まれたと聞いている。市民が自分の博物館だと思えるような、そういうものが必要だと思う。

それにはやはり、次代を担う子供たちへの対応をもっと考えなければいけないだろう。研究活動に関しても、一人一人の力は小さくても、小さな力が結集すれば大きな成果が得られるはずだ。例えば市民全員を参加させて一つの研究を進めていこうとか……。

山本　大町の山岳博物館か、山岳博物館の大町かということになると思う。博物館にどのくらい市民が関わるかで決まってくると思う。

横川　夢かもしれないが、山岳博物館という名前がある限り、国内ばかりか世界をも対象とした山岳情報の発信地になればと思う。今の若い人はしたがらないのではなく、興味さえ持てば苦しい山登りもしてくれる。夢をどう与えるかを考えれば、もっともっと情報を発信できる一大基地になってもらいたい。

工藤　やはり博物館にとって研究活動が骨格だ。しかし市民全体、議員全体がそれを理解しているわけではないので観光を考えた手段も必要だろう。問題は市民と観光客とを問わず、いかに多くの人を博物館活動に参加させていくかだ。そのためには人材ももちろん大切だが、金もつぎ込まなくてはならない。例えば目玉となる資料の購入など大切なことに行政も議会も目を向けていかなければならないと思う。

内川　山博は登山も含め、何といっても自然を相手にするところだ。自然は人に恵みとなる温かい側面もあれば、敵対的な厳しい側面もある。そのあたりで、研究の成果をとり入れつつ、自然とは何かを総合的に展示できればよいと思う。自然は千変万化するものだから他の分野の展示に比べて難しいと思うが、それだけに価値がある。

合津　私は学術と観光を対立させてみることには疑問を持っている。観光は光を観ると書く。地域の光を観るということで、博物館は地域の光の一つの凝集体であってほしい。となれば、博物館の仕事としてライチョウ、カモシカなどの研究をきっちりおさえた上で地域を深く掘り下げること、掘り下げて地域の光をいかに輝かせるかが大切になる。それが大町市における山岳博物館の前提だと思う。

研究部門に関しては、残念ながら管理部門の片手間に研究をしているというのが現状。その原因として大町市の財政事情も無視できないわけで、この際県の山岳総合センターと山博を密着させて、県なり国なりが費用を投入するように考えていかないと、諸問題の根本的解決は難しいのではないか。

それと横川さんからもお話しがあったが、山岳博物館なのだから、山のことなら大町というくらいに、少なくとも日本の山岳情報は山博に行けば得られるという状態にすべきだ。金をかけてもそれだけはぜひほしい。また、昔のように色々な分野に興味を持つ様々な人がたむろするような雰囲気・人のつながりも大切ではないか。

北沢　ライチョウやカモシカを個人的に研究するのは難しい。山博40年の歩みのなかで、学芸員が何とか研究を継続してきたという流れが大事だと思う。こうした仕事は地味だが、大きな意味で環境の面にも及ぶわけで、大町市の将来にも大切なことだ。調査研究の進展のためにも職員体制の充実を望む。

武田　山博の外郭団体に友の会があるが、かなりお手伝いできるのではないかと思う。例えば山博の雑多な仕事の一部を友の会が分担するとか、資金援助も考えられる。館として、行政としてはできないことでも、友の会ならできることも相当あると思う。

最近、市内ばかりか、県内外の会員も増えてきた。自然観察や登山などの行事の人気も高く、友の会活動に積極的に参加する人も目立ってきた。昨年夏の特別展『宮崎学・動物写真展』の期間中は、宮崎さんの写真集や絵葉書などの販売ボランティア活動に多数の会員が参加し、運営資金に役立つ相当の収益をあげることができた。

寺井さんが言われたなかで、土産の販売などは友の会が分担できる可能性がある。友の会の育成に皆さんのご協力をお願いしたい。

北原　この6月に松本の県（あがた）の森で日本鱗翅（りんし）学会のシンポジウムが開催される。こういう催しには各分野専門の研究者が全国から集まる。こうした催しを山博で行い、市民も参加したなら、きっと興味を覚える人も増えると思う。

山本　皆さんのご意見にもありましたように、山博にとって学術研究は不可欠です。しかし観光も無視することはできないというのが現実です。情報の発信にしても、その情報を大勢の人が利用することによって功をあらわすのであって、登山をする人がひと握りしかいなかったら豊富な情報もいらないわけです。そこで現代とにらみ合わせたより良い山博の将来というものを今後もそれぞれのお立場で研究され、このような機会にお聞かせいただけたらと思います。ありがとうございました。

博物館だより

展示改修にともなう閉館のお知らせ

本館内展示改修工事のため、年末年始休館も含め

平成4年12月28日～平成5年2月28日

の間閉館となります。

ご理解ご協力のほどお願い申し上げます。

なおライチョウ・カモシカ等を飼育展示している付属園（無料）はこの期間中も開園しております。また、閉館期間中の当館へのご連絡・お問い合わせは日曜・祝日をのぞいてお願い申し上げます。

展示改修をします

二月末完成をめどに第1展示室（1F）と第2展示室（2F）を左記内容に展示替えします。

○第1展示室

登山史関係の資料だけを重点的に展示。北アルプスの山小屋のジオラマの新設、ピッケル・海外登山の各コーナーの充実などを予定。

○第2展示室

山岳の自然・山麓の自然に絞り展示。山岳の自然ではライチョウ・カモシカを中心に生きもの達を紹介する予定。

山と博物館第37巻第12号
一九九二年十二月二十五日発行
発行所　〒398 長野県大町市　大町山岳博物館　TEL㉒〇二一一
印刷所　長野県大町市俵町　大糸タイムス印刷部
定価　年額一、二三〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号（長野四―一三二九二）